

# 京大広報

No. 150

京都大学広報委員会



理学部植物園遺跡から出土した縄文時代後期の甕棺

## 目次

大隅健一郎名誉教授、岡本耕造名誉教授日本学士院会員に選ばれる .....	2	白馬山の家の開設 .....	4
桑原武夫名誉教授日本芸術院会員に選ばれる .....	3	<随想> 陳列館地下室 名誉教授 宮崎市定 .....	5
京都大学自衛消防団 .....	3	<紹介> 食糧科学研究所 .....	6
		日誌 .....	6

## 大隅健一郎名誉教授、岡本耕造名誉教授 日本学士院会員に選ばれる

このたび、本学名誉教授大隅健一郎および岡本耕造の両氏が日本学士院会員に選ばれた。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介する。

### 大隅健一郎名誉教授



大隅名誉教授は愛知県出身、昭和3年京都帝国大学法学部を卒業、同年同学部助手、昭和5年京都帝国大学助教授に任ぜられ、以後、昭和41年9月最高裁判所判事に就任するため京都大学教授を辞任されるまで、三十

数年にわたり京都大学法学部において商法を講ぜられるとともに、商法およびその隣接法域（独占禁止法・証券取引法・特許法など）について多数の研究を発表され、わが国商法学界の最高權威者の一人である。

同教授の学問的関心の範囲は甚だ広く、著書・論文・判例批評などは極めて多い。その学説は、綿密明快な論理と健全な良識によって基礎づけられているため強い説得力を有し、学界および法律実務に大きな影響を及ぼしてきた。また、京都大学大学院などにおいて多数の商法専門家を指導養成されたことや、法制審議会において商事関係の立法事業に寄与されたことも、大きな業績といえる。さらにまた、昭和49年10月に最高裁判所判事を定年退官されるまで8年余の間、裁判官として、卓越した学識と鋭い洞察力とをもって数々の重要な法律問題の司法的解決に当られ、それがひいてはわが国における法理論の進展を促したといえる。そして同年11月3日、「最高裁判所判事として司法部の発展に寄与するとともに、京都大学教授として教育界に貢献した功績顕著である」とのゆえにより、勲一等瑞宝章を授与された。

同教授が研究上最も力を注がれた領域は会社法である。すなわち、『会社法論』、『逐条改正会社法解説』（大森忠夫教授との共著）、『改訂会社法論』および多数の論文・判例批評によって、数十年にわたり、わが国会社法の解釈論の発展のために指導的な役割を演じられ、また、学位論文「株式会社法変遷論」などによって、会社法の歴史および

基礎理論の研究についても多大の成果をあげられている。また、処女作『企業合同法の研究』以来、常に新しい経済事象に対し深い関心を抱き、カルテル・トラスト・コンツェルン、証券取引、ノウ・ハウおよび特許権などに関する新しい法律問題について、先駆者的な意義を有する幾多の研究を発表されている。さらに、商法総則・商行為法・手形小切手法に関する造詣も深く、『商法総則』、『商行為法』、『手形法小切手法講義』は、いずれも標準的な体系書ないし教科書として定評があり、また、これらの領域に関する論文および判例批評も多い。

以上のように、教授の学問的業績は輝かしいものであり、そのわが国法律学会に対する貢献は偉大である。（法学部）

### 岡本耕造名誉教授



岡本名誉教授は富山県出身、昭和6年京都帝国大学医学部を卒業、直ちに医学部病理学教室に入局、昭和11年講師、昭和20年京都帝国大学附属医学専門部教授、昭和21年兵庫県立医科大学教授、昭和27年神戸医科大学

教授、昭和28年東北大学教授を経て昭和31年8月本学医学部教授となり、病理学の教育研究に尽力された。昭和47年本学停年退官後は近畿大学医学部教授となられ、昭和51年同大学医学部長として今日に至っている。

同教授の業績は病理学の広い分野にわたり多岐に及んでいるが、その中心は40有余年終始一貫して遂行された糖尿病ならびに高血圧症の実験病理学的研究である。本学病理学教室入局後直ちに組織化学の研究に没頭され、有機分析試薬の組織化学への応用に努力された。そして体内に存在する化学物質24種の組織化学的証明法を創作されたが、とくに亜鉛の組織化学的証明法を応用して、膵臓ラ氏島に多量の亜鉛が存在することを世界で初めて見出された。そして、この事実をもとにしてジチゾン等30種類以上の亜鉛試薬に糖尿病発症作用のあることを見出し、有名な糖尿病亜鉛学説を提唱された。さらに、これら亜鉛試薬を投与し糖尿病を発症させた動物の交配を何代もくりかえ



して、糖尿病の自然発症をみる「先天性糖尿病動物」の作成に成功された。

ついで、この糖尿病の実験研究成果の上に立ち、昭和30年頃から高血圧症の研究に着手され、昭和35年以来 Wistar 系ラットの中から選択的兄妹交配をくりかえし「高血圧自然発症ラット」(SHR)の系統作成をなしとげられた。このネズミの系統は無処置で全例高血圧を発症し、同時に高血圧症の心血管病変を合併し、また人間の本態性高血圧症に最も近い点で他に類をみない動物である。

さらに、この高血圧自然発症ラットの中で脳卒中を発症するラットの系統の選択的兄妹交配を非

常な努力をもってくりかえされ、高率(90%以上)に脳卒中の発生をみる脳卒中易発症性 SHR の分離にも始めて成功された。これらの動物は、国内はもとより欧米各国の研究室(200カ所以上)に分与されているが、高血圧症の研究領域で飛躍的な発展をもたらしたのものとして極めて高く評価されている。そしてこれらの研究に対して、昭和37年日本医師会医学研究奨励賞、昭和47年日本学士院賞、昭和49年第1回国際高血圧学会賞などが授けられている。

なお、昭和43年から44年まで本学医学部長として大学紛争の解決に尽力された功績も記憶に新しいところである。(医学部)

### 桑原武夫名誉教授日本芸術院 会員に選ばれる



このたび、本学名誉教授桑原武夫氏が日本芸術院会員に選ばれた。

桑原名誉教授は福井県出身、昭和3年京都帝国大学文学部フランス文学科を卒業後、大阪高等学校教授、東北大学文学部助教授を経て、昭和23年本学人文科学研究所教授となった。戦後、新たに出発したばかりの同研究所の西洋部主任となり、20年にわたってフランス近代思想および近代史に関する共同研究を主宰した。その成果として『ルソー研究』(昭和26年、毎日出版文化賞受賞)をはじめ、『フランス百科全書の研究』、『フランス革命の研究』、『文学理論の研究』など数多くの研究業績が刊行された。

この間、昭和34年から38年まで人文科学研究所長をつとめ、昭和43年京都大学を退官し名誉教授となった。なお、昭和29年から日本学術会議会員となり、同じく39年から9年間、日本学術会議副会長を歴任した。

同教授の専攻はフランス文学であり、スタンダール、アラン、ルソーなどに関する研究と翻訳によってフランス近代文学をわが国に紹介したばかりでなく、『第二芸術論』、『文学入門』をはじめとする多くの著書・論文によって、日本の文化や社会に透徹した批評を加えるとともに、積極的な啓蒙活動を展開して、戦後の論壇や世論に大きな影響を与えた(『桑原武夫全集』全7巻、朝日新聞社)。

このたび同教授が日本芸術院会員に選ばれたことは、以上の業績から見てまことに当然のことではあるが、本研究所としても喜びにたえない次第である。(人文科学研究所)

### 京都大学自衛消防団

**組織と任務** 京都大学には、昭和26年以来自衛消防団がある。本学附近に居住する職員の中から総長の委嘱をうけた30名で組織している。その任務は、本学における火災その他変災に当り、消防・警備・救護および物品の搬出に従事することである。

**装備と性能** 自衛消防団が保有している装備は、消防ポンプ自動車一台で、それに附属する主な部



品として、ホース10本（長さ1本当り20米）、給水管2本（長さ1本当り10米）、筒先2本、鳶口2本等があり、この消防ポンプ自動車は、毎分1200立方メートルの放水が可能な性能をもっている。

**訓練** 自衛消防団員は、有事に備えて、何時でも行動できるように、日頃から厳しい訓練に取り組んでいる。訓練の方法には、次の2通りがある。

(1) 消防学校入校訓練

この訓練では、各種消火器具の操作方法や比較的高度な消火技術を修得する。

(2) 構内防火訓練

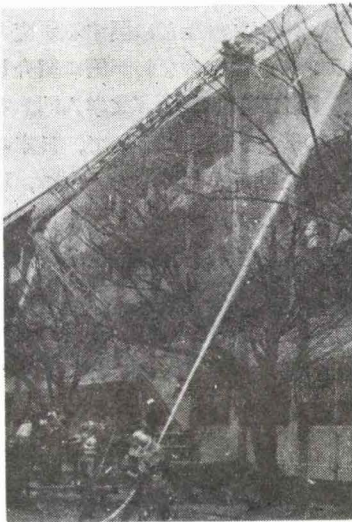
消防署の指導によって、保有装備の操作方法や放水の実地訓練をする。

構内の人通り、教育環境、立地条件等を考慮して、最近は主に北部構内を訓練場としている。

年末には訓練の総仕上げとして、出火場所を仮定し、発煙筒を焚いて消火の実地訓練を行ない、一年間の幕を閉じる。

**活動状況** この一年間における自衛消防団の活動状況は、下表のとおりである。

件名	発生日	事件概要	活動状況
1 極低温研究室の件	52. 1.29	液体窒素製造機の連結チューブが白煙をあげ燃焼し、炎があがりかけていた	消防ポンプ自動車出動
2 主計課長室の件	52. 7. 9	火炎ビンのようなものが投入され、机、椅子、書類の一部が焼けた	徹夜で警戒と現場保存に当る
3 物理学工場の件	52. 8.30	建物の屋根裏の一部焼失	消防ポンプ自動車出動、徹夜で警戒と現場保存に当る
4 医学部構内の件	52. 9. 7	乗用自動車内部焼失	消防ポンプ自動車出動、警戒と現場保存に当る



**連絡方法とその要点** 自衛消防団の出動を必要とするときの連絡場所は、本部表門衛所（内線2201）になっている。門衛所から消防団への連絡、消防団から各団員への連絡網は完備している。

連絡の際は、① 発生場所、② その内部の概要（例えば、爆発のおそれのある薬品の有無等）を簡潔に伝えてほしい。これは119番で消防署へ連絡するときも同様である。

**むすび** この一年間の火災発生事件が、すべてボヤ程度に止まったことは、火災の早期発見に負うところが極めて大きい。今後も引き続き各自の持場における火気取扱いに留意されるよう、皆さんの協力を切望する。（京都大学自衛消防団）

白馬山の家の開設

毎年、利用者から好評を受けている白馬山の家を、今冬は下記のとおり開設いたしますので、本学の学生および教職員が利用される場合は、下記を参照のうえ、申し込んでください。

この山の家は、中部山岳国立公園白馬山麓の榎池高原にあり、四方を北アルプスの峰々に囲まれ、冬季には積雪量も多く、雪質の良さとともに

スキーには絶好の条件を備えています。

建物は、山小屋風の木造2階建地下1階で、間取りは主として1階に食堂兼談話室、2階は寝室（ベッドで42名収容）、地下は浴室、乾燥室等からなっています。

記

- 名称 京都大学白馬山の家
- 所在地 長野県北安曇郡小谷村大字千国字柳久保乙869の2





## &lt; 紹 介 &gt;

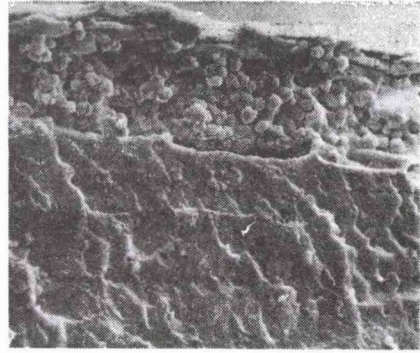
## 食糧科学研究所

食糧科学研究所は、昭和21年9月16日、食糧の生産、加工利用ならびに貯蔵に関する基礎および応用の研究を行なう目的で創立された。

当時の鳥養利三郎総長、近藤金助教授（初代所長）をはじめ、その他の方々の努力により、国立大学附置研究所中食糧に関する研究分野では唯一の研究所として、4研究部門構成で発足した。

しかし、当初は戦後の窮乏を極めた時代であったため、建物および設備に関する予算はほとんど認められず、農学部との協力を得て、それぞれの研究活動をつづけた。やがて、自然科学系研究所が宇治地区に統合する方針が決定され、本研究所もその計画の一環として、昭和45年9月、現在地への移転を完了した。この間、研究部門の増設、転換を進めて、現在、「食糧貯蔵加工」、「食糧生産」、「食糧化学」、「たんばく食糧」、「食品分析」、「応用微生物」および「食糧安全性」の7研究部門より構成されている。

FAO（国連食糧農業機構）の指摘どおり、将来において、世界的食糧不足が予見されるとともに、今日省エネルギー、環境改善の時代を迎えてわが国の食糧問題もいよいよ重大性を加え、新しい観点からの再検討が要望されている。そもそも食糧の主体は、生物あるいはそれに由来する生体物質であり、これを摂取し利用する側も、人間あ



（玄米外層断面の走査型電子顕微鏡写真）

るいは家畜という生物である。したがって、食糧の生産ならびに貯蔵、加工あるいは利用の基礎は生物の行なう生命現象をいかに的確に把握し、これをいかに人為的に助長し、あるいは制御するかにかかっていると見てよい。当研究所ではこのような観点に立って、基礎生物学を共通の研究の場とし、それぞれの専門における基礎研究を深めるとともに、社会の要請する重要課題について、上記7研究部門間の共同研究を推進している。

当面の研究課題は、たんばく、油脂などの新食糧資源の開発、未利用食糧資源の有効利用、微生物、培養細胞を利用する食糧素材の生産、食糧の長期貯蔵と食品の劣化防止、新しい食糧原料を利用する場合の安全性の問題などである。

（食糧科学研究所）

## 日 誌

（1977年11月1日～11月30日）

11月1日	評議会	15日	人文科学研究所公開講演会
3日	原子炉実験所一般公開	16日	国際交流委員会
4日	食糧科学研究所講演会	19日～20日	総長候補者の選挙
7日	フランス国フランス公共事業財団 Christophe Cornier 氏ほか5名来学	20日	評議会
〃	デンマーク国コペンハーゲン大学教授 K. Glamann 氏人文科学研究所を訪問	25日	創立70周年記念後援会助成金選考委員会 〃 同和問題委員会
8日	評議会	28日	学位授与式 〃 原子エネルギー研究所公開講演会
11日	フランス国コレール・ジュ・ド・フランス 教授 Claude Lèvi-Strauss 氏来学	〃	ザイール共和国 科学庁副長官 Ekoko Sokombe 氏教養部を訪問（12月10日まで）
12日	理学部公開学術講演会	29日	学術講演会（全学）
14日	総長、職員組合と交渉		